

フェリックス・ホフマンさんによせて

さとう わきこ
絵本作家

父親を早く亡くした私は、ホフマンさんの、父親としての愛を見つけるたびに、目がしらが熱くなる。日本の父は、あまり愛情をむきだしにせず、ちょっとひかえめな愛を子供達に与えてきた。それ故に、日本の父の愛はわかりにくいんだけど、ホフマンさんの愛はダイナミックでわかりやすい。

1996年2月、ロンドンからスイスへ行き、雪のアーラウ市にあるホフマン家を訪れてから、2年目になる。その間ホフマン家を訪れたのは、10回以上だと思う。訪ねるたびに、ホフマン家の御家族が私達に胸を開き、いろいろな一家の歴史を語ってくれた。

去年、1997年12月にホフマン家へうかがったとき、一番末っ子のディーター氏に、はじめてお会いした。ホフマンさんをちょっと子供っぽくしたか感じで、子供時代の写真に見られたいたずらっ子の面影が残っていた。そうはいっても彼は、もう50代だろうと思われる。彼のいたずらは、姉達から聞いていた。小さい時は、よく三輪車に乗って、どこへでも出掛けてしまった。ある時姿が見えなかったので、青くなって捜していたら、駅から電話があり呼ばれていくと、ディーターが三輪車で、線路の上を走っていたという。「どうしてそんなことをするの、危ないじゃないの」ときくと、ディーターは、「大丈夫、信号が赤だもの」と言ったそう。それから彼の背中には、大きな迷子札がつけられるようになった。

彼は仲々まめで、家の近所のパン屋によく出掛けた。しかも決まった時間になると、いそいそと出掛けていく。その時間は、近くの学校の学生が昼食のパンを買いに来る時間で、彼が三輪車に乗りニコニコしていると、学生達が「かわいい」といって、パンをくれるのだった。つまりパンをもらいにいそいそと出掛けていくというわけで、こまったホフマン夫人は、彼の背中の迷子札の下に、もう一つの札を付け足しこう書いた。「えさを与えないでください」と。これは、家族のエピソードの一つである。

四人の子供達、それにホフマン夫人、それぞれの思い出があり、聞くたびに私達も楽しくなる。

二女クリスティアーネは、結核にかかり郊外のサナトリウムに入っていた時、グリムの「ねむりひめ」の手描き絵本を父からもらった。三女のズザンヌは、はしかの時、生まれたばかりの弟に会わせてもらえず、その代わりにグリムの「おおかみと七ひきのこやぎ」の手描き絵本をもらった。ずっと後になって、伝染病のしょう紅熱になった時にも入院したので、父から絵入りの手紙をもらった。その手紙は殺菌の為、熱いアイロンを何回もかけてから家に持って帰り、今でも宝物として、ズザンヌの所にある。

長女のサビーネは、こういったアクシデントのない丈夫な女の子だったので、何ももらえなかった。彼女も父から自分の為だけの手描き絵本が欲しくて、9歳の誕生日のプレゼントにしてもらいたいとのみ、「ラプンツェル」を描いてもらった。

三人の子供達それぞれが絵本をもらった為、四人目のディーターには、自動的に一冊贈られた。それが「七わのからす」だった。ディーターは言っていた、「いつのまにかもらっていた」と。ディーターは赤いズボンが好きでよくはいていたので、「七わのからす」の中で一番小さな男の子は、赤いズボンをはいた子供になっている。

絵をもらった順番は、三女ズザンヌが最初に「おおかみと七ひきのこやぎ」をもらった。その時の絵をもとに、後に絵本化されているのだが、この絵本は1957年に、ドイツ児童書優秀賞をもらってしまうのである。子供達が絵本をもらった順番と、出版社で絵本化された順番は、全く違っていて、一番最初に絵本になったのは、長女のもらった「ラプンツェル」だった。

ホフマンさんは、はじめて作る絵本を、石版のリトグラフで制作した。一場面を、4色の手刷りで刷りあげた。たまたま私達は、その4色手刷り絵本を手に入れることが出来たが、表面をさわると、わずかな砂目のざらつきが手に伝わって、感動した。しかし、最初に本を出したアマーバッハ社は倒産し、手刷りのリトグラフ絵本2000部のうち、ホフマンさんの手に入った印税は1000部分だけで、残りの1000部の

絵本はどこにいったか分からず、お金も入って来なかった。その為ホフマンさんは、大変がっかりして、しばらく絵本の仕事をしなかったという。

ホフマンさんの絵本のほとんどは、石版のリトか金属版のリトで制作されている。私はよく、絵描きを続けるには“腕力と体力”と言っていたが、まさにその通りで、相当の体力がないと石版の絵本など出来ないものである。ホフマンさんの絵本「ねむりひめ」の表紙を見ると、王様には似つかわしくないほどの、がっしりした手が描かれている。これはホフマンさんの手に違いないと思う職人の手なのだ。壁画やステンドグラス、モザイクなど、アーラウ近郊には、そういったホフマンさんの職人的手の仕事が、そのまま残されている。

今年1998年から、ふたたびホフマン展をするにあたり、去年1997年の12月に、展覧会用の絵を借りて来た。四人の子供に贈られた絵本はもとより、ステンドグラスの下絵、壁画の下絵、『クリスマスのもものがたり』のダミー、エスキース、グリム童話集の原画、スイスの伝説の原画、木版画やリトグラフ、銅版画などなど、フェリックス・ホフマンさんの多彩な仕事ぶりがしのばれる物を、たくさん借りてこられた。日本の各地で、多くの人々にホフマンさんの絵を見てもらいたいという思いだけで、私達は何回ものスイス行きを行ったのである。

今、私にとってスイスといえば、カリジェ、ホフマン、フィッシャー、クライドルフの生まれた国、小さいけれど自然のたくさん残っている美しい町、つつましく昔が息づいている町として心に定着している。しかし、世界中で起きているのと同じように、この国にも子供達の麻薬汚染が広がっていて、中学生ぐらいになれば、たいていの子供が経験を持ってしまうのだと、スイスの友人は暗い顔をした。9月に行った時の、町の窓や道端を飾る美しい花とは裏腹なこの話を聞いて、人は何故…と問うてしまうのであった。

出典「父から子への贈りもの フェリックス・ホフマンの世界」
小さな絵本美術館©1998年発行